



あかね文庫お話しの会 おひさまだより



絵本アンケート

“私の好きな絵本”

(医療系 Hさん)

子どもが小さい時、福音館書店の月刊誌「こどものとも」シリーズを愛読していました。

中でも林明子さんの『こんとあき』『はじめてのおつかい』『あさえといもうと』や、やまんばの娘まゆちゃんシリーズが好きでした。林明子さんの本は、4～5歳頃のおねえちゃんになりかけた娘の心をつかんでいました。ワクワク、ドキドキ、でも少し心も痛かったりと等身大に感じる内容だったのだと思います。

息子の方は0歳の頃は『リンゴがドスーン』(多田ヒロシ著 文研出版)が大好きで、ケタケタ笑って見ていました。大きくなってからは『おいしいのぼうけん』(ふるたたるひ作 童心社)など探検・冒険ものが好きになりました。



えほんの紹介

「あおくと きいろちゃん」

レオ・レオーニ さく
藤田圭雄訳 至光社

今ちょうど新潟県立万代島美術館にて、絵本作家のレオ・レオーニ展が開かれています。そこでその代表作のこの絵本をご紹介します。

デザイナーのレオ・レオーニが孫のために、ちぎり絵の抽象的な図だけで表現したユニークな絵本です。青い丸のあおくと黄色い丸のきいろちゃんが街角でばったり出会い、うれしい気持が溶け合うとふしぎふしぎ一人の緑の子になりました。遊びつかれて家に帰ると、どちらのパパにもママにも「うちの子じゃない」といわれてしまいます。二人は泣きに泣きました。すると、またもふしぎなことが...! パパにもママにもそのわけがわかりました。子どもは素直に物語をたのしみ、満足します。心に残る一冊になるでしょう。

小さなおともだち

お人形たちに守られて

Aちゃんは絵本が大好きで絵をじっくり見て、おはなしもよく聞いています。『わたしのワンピース』の本で、「わたしににあうかしら」に「似合うよ」、二回目の「わたしににあうかしら」には「似合うよ、似合うよ」、三回目には「いままで一番似合うよ」と絶妙な合いの手がはいります。

ある日、「こわい本を読んで」というので『くわすによぼう』を読むことにしました。読み始めようとすると、「ちょっと待って」と言って、ドラえもんやたくさんのお人形たちをベッドのテーブルに並べて「これでよし!」と独り言。いよいよ女房がこわい鬼婆に変身する場面になりましたが、Aちゃんの表情は変わりません。きつとお人形たちが守ってくれるので安心なのでしょう。鬼婆に追いかけられた男が菖蒲の茂みに隠れたところを指差すと、「教えちゃダメ!」と言われてしまいました。どの絵本もしっかりお話の世界に入り込んで楽しむAちゃんです。